

〔教育実践研究報告〕

子どもと子どもを取り巻く社会の観察における学生の学習成果

茂 本 咲 子 泊 祐 子 石 井 康 子
長 谷 川 桂 子 山 田 小 夜 子

Students' Learning Outcome from Observation of Children and Surroundings

Sakiko Shigemoto, Yuko Tomari, Yasuko Ishii,
Keiko Hasegawa, and Sayoko Yamada

はじめに

本学育成期看護学概論Bの授業において、入学直後に実施している「子どもと子どもを取り巻く社会の観察」（以下、フィールド観察）について、長谷川ら¹⁾はこの課題によって、子どもへの関心は高まる傾向にあると述べている。小児看護学教育の研究において、草野ら^{2,3)}は小児看護実習における子どものイメージの変容を、山中ら⁴⁾は子どもへの関心や疾患をもつ子どもの理解の変化を分析している。しかし、健康な子どもを含めた子どもと子どもを取り巻く社会に対する学生のとらえ方を明らかにした報告はない。

そこで今回、フィールド観察記録の概念化を試みることにした。

I. 研究目的

本研究の目的は、フィールド観察で学生がとらえた子どもと子どもを取り巻く社会の内容を概念化して、フィールド観察の学習成果を明確にすることと、育成期看護学概論Bにおけるフィールド観察の位置づけを再考することである。

II. 育成期看護学領域におけるフィールド観察の位置づけと概要

1. 授業科目の構成

育成期看護学講座は母性看護学、小児看護学、学校看護の学問領域を担当している。主に子どもを対象とした

教育カリキュラムは、第1セメスターで育成期看護学概論B、第2セメスターで小児の成長発達を支える看護と日常生活援助の技術演習、第3および第4セメスターで母子保健福祉活動の中で機能する看護、健康問題をもつ小児の看護と治療を伴う援助の技術演習である。さらに、第5および第6セメスターで領域別実習、第7および第8セメスターで卒業研究を実施している。

2. 育成期看護学概論Bの概要

育成期看護学概論Bの目的は、子どもの特徴を理解し、子どもを対象とした看護の特徴と役割について理解することであり、目標は下記の3点である。

- 1) 子どもの成長発達、健康課題、生活からその特徴を理解する。
- 2) 子どもを対象とした看護の役割について理解する。
- 3) 学校で展開する学校看護活動を理解する。

育成期看護学概論Bの教授方法は、講義、フィールド観察、育成期看護学領域における看護実践場面の見学実習（以下、学外演習）である。

フィールド観察の目標は、子どもの日常生活場面を観察し、子どもと子どもを取り巻く人々のかかわりを考察することとした。これは、育成期看護学概論Bの目標1)の到達を目指す学習課題の1つである。

3. フィールド観察の実施内容

平成16年度の入学生に対して、初回授業時にフィールド観察のオリエンテーションを行い、学生1名につき2～3場面の観察記録を書くことを課した。

記録内容は観察場所、観察内容、考察とした。観察する子どもの年齢の制限や特定については、成長発達に関する授業が進んでいないことを考慮して不要とし、新生児期から思春期を含めた子どもの理解を目指した。観察場所は自由とし、実施にあたっては子どもと一緒にいる家族に名乗り観察の許可を得ること、プライバシーを守るように行動することを、学生に説明した。

観察期間は約3週間とした。観察記録を回収した後、学習内容の共有を目的に、学生間でグループディスカッションを実施した。

Ⅲ. 方法

1. 対象

研究対象は平成16年度に育成期看護学概論Bを受講した1年次学生81名と3年次編入学生8名、計89名の観察記録とした。分析対象は研究参加の同意が得られた74名の学生の観察記録で、これらは174場面から成っていた。

2. 分析方法

まず、共同研究者全員で観察記録174場面の考察内容を読み、499の有意義センテンスに分けた。次に、複数の命名を可として539の要約内容を抽出した。さらに、類似する要約内容をまとめてサブカテゴリ、カテゴリ、コアカテゴリへと抽象化した。カテゴリ化にあたっては、共同研究者間で合意が得られるまで繰り返し検討した。

3. 倫理的配慮

フィールド観察のオリエンテーションで、学生に対して観察記録の使用目的、個人は特定されないこと、研究参加は自由であり拒否しても成績には影響しないことを、口頭で説明した。観察記録用紙に同意の有無に関する回答欄を作成し、観察記録の提出を求めた。

Ⅳ. 結果

1. 観察場所

学生がフィールド観察を実施した場所は、児童館が最も多く32場面(18.4%)で、自宅または親戚の家が29場面(16.7%)、店が28場面(16.1%)、公園が23場面(13.2%)、乗り物の中や駅が19場面(10.9%)であった(表1)。

表1 観察場所

場 所	場面数	%
児童館	32	18.4
自宅・親戚の家(庭や畑を含む)	29	16.7
店・おもちゃ売り場	28	16.1
公 園	23	13.2
電車・バス・駅	19	10.9
レストラン・食堂	11	6.3
図書館	10	5.7
道 路	7	4.0
お祭り会場	4	2.3
幼稚園・保育園・託児所	3	1.7
病院	2	1.2
小学校グラウンド	2	1.2
その他	4	2.3
合 計	174	100.0

2. フィールド観察の学習成果

分析の結果、【子どもの理解】、【親子の理解】と【子どもと周囲のかかわりの理解】の3のコアカテゴリが抽出された。それらは8のカテゴリ、51のサブカテゴリで構成された(表2)。以下、コアカテゴリを【 】で、カテゴリを《 》で、サブカテゴリを「 」で示し、内容を説明する。

1) 【子どもの理解】

【子どもの理解】は、《子どもからのほたらきかけ》《子どものもののとらえ方》と《発達している子ども》の3のカテゴリで構成された。

《子どもからのほたらきかけ》は、「好奇心旺盛」「承認欲求」「模倣」「自己主張」「反復性・多動性」「観察」の6のサブカテゴリで構成され、周囲の人や物などの目標に向かって、自らはほたらきかけている子どもの行動が含まれた。

《子どものもののとらえ方》は、「自己中心性」「子どもの世界」「発想力」「豊かな感情」「性差」「個別性」の6のサブカテゴリで構成され、子どものもののとらえ方は大人と異なること、とらえ方には性差や個性があることが含まれた。

《発達している子ども》は、「感覚」「関係認知」「運動能力」「言語能力」「思考能力」「感情抑制」「自発性」「自尊心」「羞恥心」「社会への適応」「日常生活行動」「年齢差」「発達の速さ」「経験の重要性」の14のサブカテゴリで構成され、子どもの能力を評価して発達段階を考察したものや、成長発達過程の理解が含まれた。

2) 【親子の理解】

【親子の理解】は《親子関係》《親のかかわり》の2の

表2 フィールド観察の学習成果カテゴリ

コア カテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ	要約内容の例	記述 数	
子どもの 理解	子ども からの はたらき かけ	好奇心旺盛	周囲のいろんな物に興味を持つ 興味あることに集中する	52	
		承認欲求	周囲の関心を引こうとする ほめられると喜ぶ	35	
		模倣	父母の真似をする 年少児は年長児の真似をする 周囲の人と同じことをしたがる	31	
		自己主張	思い通りにならないと泣く 意思に反する親の注意に反発する	14	
		反復性・多動性	同じことを繰り返す 何度も質問をする じっとしていない	12	
	子どもの ものの とらえ方	観察	じっと人を見る 周囲の人の行動を観察している	5	
		自己中心性	独占欲が強い 人のものをほしがる	16	
		子どもの世界	自分の世界をもつ 3歳児はぬいぐるみを命あるものと理解する	11	
		発想力	1つのものでさまざまな遊び方をする発想力がある 何でも遊びに変える	5	
		豊かな感情	感情が変わりやすい 全身で感情を表現する 率直に感情を表現する	14	
		性差	男の子は乗り物に興味がある 男女の性の違いを気にする	16	
		個別性	好き嫌いがある 同じ3歳児でも個性や性格で反応が異なる	12	
		発達 している 子ども	感覚	触ったり口の中に入れたりしてどんな物なのか確かめている	8
		関係認知	1歳児は人見知りをする 人を見てから近づく	7	
		運動能力	3～4歳児はしっかり走ることができる 力の加減がわからない	7	
	言語能力	1歳児は言葉を理解できる 2～3歳は言葉を覚えて話したい年齢である	9		
	思考能力	問題解決能力がつく 善悪の区別ができる	12		
	感情抑制	転んでも泣かない 5歳児は気持ちをコントロールできる	4		
	自発性	自分でやりたいと思い始める 自分で考えて行動することに喜びを感じる	11		
	自尊心	上手にできないことはやりたくない	1		
	羞恥心	小学生には羞恥心がある	1		
	社会への適応	社会のルールを理解する お手伝いを楽しむ	14		
	日常生活行動	スプーンを持つことができる 3～4歳児は自分で靴下を履く	4		
	年齢差	年齢の違いで行動に差がある 年齢の違う子どもとの比較によって発達を確認できた	7		
	発達の速さ	1年で歩けるようになった 見聞きしたことをすぐ吸収する	2		
	経験の重要性	子どもは経験しながら成長していく	1		
親子の 理解	親子関係	安心の源	母親がそばにいと安心する 親への信頼があると親から離れられる	52	
		コミュニケーション	親子が楽しそうに遊んでいる 父親と子どもが接することはどちらにとっても大切である	14	
		相互の理解	親は他人に分からない子どもの言葉が分かる 母親は子どものやりたいことにすぐに気づく 子どもは母親の表情を読み取る 親の注意を聞く	12	
		仲良し	家族揃っての食事では笑顔である 手をつないで歩く家族は幸せそうでよい	4	
	親の かかわり	しつけ	甘やかしと子どもの主張のバランスをとることが大切である 親は子どもに役割を与え社会化を促す	20	
		安全管理（親）	親は子どもの目の届くところで様子を見守る 子どもから目を離せない	17	
		応答性（親）	母親はひとつひとつ子どもに説明する 子どもに分かるような説明を行う	5	
		愛情	親は子どものことを一番に思っている 親の厳しさも愛情表現である	19	
		同じ目線	母親は子どもに目線を合わせて叱っていた 子どもの目線に合わせて話し掛けることはよい	4	
		父母の育児の差	父親は子どもと接する時間が少ない 父親も子育てに関わっている	7	
子どもと 周囲の かかわり の理解	きょうだい のかかわり	年少児への配慮（きょうだい）	姉が弟の世話をする 姉としての自覚がある 姉や兄は我慢ができる	17	
		相互の学び	きょうだいがいると社会性が身につくやすい きょうだいがいると良い面がたくさんある	3	
	子ども同士 のかかわり	同年代への興味	同世代の子どもを気にする 母親から離れ同年代の子どもと遊びたがるようになる	10	
		年少児への配慮（子ども同士）	年少児に優しく接する 年少児の面倒を見る	7	
		並行遊び	子ども2人がそれぞれ自分の好きなように遊ぶ 同年代の子と一緒にいてもひとりで遊ぶ	5	
		連合遊び	時には他児と協力して楽しむ	1	
		協同遊び	友達と役割を決めて遊ぶ ごっこ遊びをする	6	
		力関係	3人の中に中心的な子とついていく子がいる 年少児には強気だが年長者には畏怖をもつ	4	
		競争心	競争心むき出しでじゃれあう 小学生は金魚すくいで数にこだわる	2	
		集団生活の意義	集団生活の場は子どもの成長に影響する 異年齢集団の中でルールを身につける	4	
		社会の かかわり	安全管理（社会）	自分の子どもではなくても注意したり声をかけたりする 周りの人も子どもに注意を払う	3
			応答性（社会）	子どもの知らないことを何度も教える 子どもの質問にしっかりと答えていくことの大切さ	3
			配慮	飲食店に子ども専用の椅子がある 子どもが迷惑なことをしても周囲の人は笑顔である	3
			環境	自然に触れることが子どもにより影響を与える 子どもの前で喫煙する周囲の大人に対して憤りを感じる	4
			子どもの存在意義	周囲の人にとっても子どもはかわいくて特別な存在である 子どもには癒しの効果がある	2

カテゴリで構成された。

《親子関係》は「安心の源」「コミュニケーション」「相互の理解」「仲良し」の4のサブカテゴリで構成され、親子の相互作用の理解等が含まれた。

《親のかかわり》は、「しつけ」「安全管理（親）」「応答性（親）」「愛情」「同じ目線」「父母の育児の差」の6のサブカテゴリで構成され、両親のしつけや安全管理、母親と父親の育児に差がある内容が含まれた。

3) 【子どもと周囲のかかわりの理解】

【子どもと周囲のかかわりの理解】は、《きょうだいのかかわり》《子ども同士のかかわり》および《社会のかかわり》の3のカテゴリで構成された。

《きょうだいのかかわり》は、「年少児への配慮（きょうだい）」「相互の学び」の2のサブカテゴリで構成され、年長児が年少児に配慮しながら、相互に学ぶきょうだいの理解等が含まれた。

《子ども同士のかかわり》は、「同年代への興味」「年少児への配慮（子ども同士）」「並行遊び」「連合遊び」「協同遊び」「力関係」「競争心」「集団生活の意義」の8のサブカテゴリで構成され、同年代や異年齢集団における子ども同士の関係性、遊び方、集団生活の意義等が含まれた。

《社会のかかわり》は、「安全管理（社会）」「応答性（社会）」「配慮」「環境」「子どもの存在意義」の5のサブカテゴリで構成され、家族以外の周囲の人も育児に参加していること、環境が子どもに与える影響、子どもの存在が社会に与える影響を与える内容等が含まれた。

V. 考察

1. フィールド観察による学習成果と限界

1) 子どもの理解

入学初期の学生はフィールド観察を通して、子どもの行動を意識的に観察し、《子どもからのほたらきかけ》《子どものもののとらえ方》をとらえることができた。子どもには自ら外界へはたらきかける力があること、子どものもののとらえ方は大人と異なるという理解は、対象の特性を理解して小児看護を行う上で、必要不可欠であると思われた。

成長発達については、授業が進んでいないため、一般的な知識と結びつけて、観察した子どもの成長発達段階

を考えることは難しく、本課題の目標に設定していない。しかし、入学以前の知識を活用して発達段階を推測し、異年齢集団の子どもを比較して「年齢差」をとらえることはできていた。学生が成長発達の知識を十分に習得していなくても、子どもの能力に注目して、《発達している子ども》を理解できたと考えられた。

日常生活行動に関する記述は、食行動と衣類の着脱行動に限定されていた。これは、フィールド観察を行った場所が、家や児童館での場面が多かったことと関連していると推測された。日常生活行動の学習を促進させる場合は、観察場所を特定したり、子どもと長時間かわれる場面を設定したりする必要があると思われた。

子どもの健康課題について、記述された記録はなかった。子どもの健康状態と生活環境との関係について、西田ら⁵⁾は①健康な子どもの日常的な場面、②健康な子どもの非日常的な場面、③入所施設にいる障害をもつ子ども、④通院施設にいる障害をもつ子ども、⑤在宅の障害をもつ子ども、⑥入所施設にいる病気の子どもの、⑦通院施設にいる病気の子どもの、⑧在宅の病気の子どもの8つの状況があると報告している。フィールド観察は、健康な子どもの日常的な場面の学習と位置づけているので、健康課題との関連については、このレポートを用いて行うフィールド観察後のグループディスカッションで、意識的に引き出すことが必要であると思われた。

2) 親子及び子どもと周囲のかかわりの理解

子どもだけではなく、子どもを取り巻く社会を意識的に観察することで、子どもにとって親は「安心の源」であること、親子の「コミュニケーション」や「相互の理解」、母親や父親の「愛情」「しつけ」「安全管理」「応答性」などを、学ぶ機会になっていた。

また、【親子の理解】だけではなく、《きょうだいのかかわり》《子ども同士のかかわり》《社会のかかわり》といった【子どもと周囲のかかわりの理解】も促進されていた。これらには、かかわり方の形態の特徴と、かかわりの意義を示す内容が含まれた。さらに、《社会のかかわり》には周囲の人だけではなく、子どもと環境の関係の理解も含まれていた。《社会のかかわり》の記述数は15と少ないが、本研究では、フィールド観察により《社会のかかわり》を学習できることに意味があると思われた。

子どもは自らのもてる力と適切な環境の相互作用のなかで、各時期の発達課題を達成していくものであり、小児看護の対象である子どもの特徴を理解するためには、子どもに影響を及ぼす家族の特性、さらにはその背景にある社会の特性を理解する必要がある⁶⁾。本研究で抽出された概念を用いて、子どもの成長発達に影響を及ぼす要因について学習を深めることができるのではないかと考えられたので、今後の授業に活用したい。

3) コミュニケーション技術の習得のための概念の理解

子どもに看護を行うためには、対象の特性に応じたコミュニケーションの技術の習得が重要である。小児看護学実習準備としての演習方法について、中林ら⁷⁾は、子どもの発達に応じたコミュニケーションを通じて成長発達を遂げる子どもと家族の特性を理解する演習として、①子ども・家族へのインタビュー、②サマーキャンプ・スキーキャンプの見学、③デパート見学、④児童館・子ども会・スポーツクラブの見学、⑤交流会の開催、⑥家庭訪問、⑦患者会の見学、⑧おもちゃの作成などが考えられると報告している。

フィールド観察は、子どもの特徴や成長発達段階に応じたコミュニケーション技術の学習を目指す教育方法ではないので、本研究において、コミュニケーション技術の学習成果を評価することはできない。しかし、子どもやその家族とのコミュニケーションを学習する上で、重要な概念であると思われる《子どものもののとらえ方》《子どもからののはたらきかけ》《親のかかわり》《社会のかかわり》を理解できたことは、意義深いと考えた。

2. 育成期看護学概論Bにおけるフィールド観察の位置づけと補強点

本研究を通して、入学初期の学生であっても、実際の場面を意識的に観察することにより、健康な子どもの特徴、周囲の人や環境とのかかわり方を理解できた。これらの学習成果を活かして、育成期看護学概論Bの目標1) 子どもの成長発達、健康課題、生活からその特徴を理解することを達成するための、授業の補強点を述べる。

子どもの成長発達については、育成期看護学概論Bおよび育成期看護方法5で展開される授業で、フィールド観察の学習成果を活用し、子どもの行動と成長発達に関する概念を、関連づけて授業を進めていくことが大切

であると思われた。そのなかで、フィールド観察の考察内容を見直し、観察した子どもの成長発達段階を正しくとらえられるようにすることも、重要だと思われた。日常生活行動については、観察できた学生が少ないため、VTRの活用等の工夫が必要である。

【親子の理解】や【子どもと周囲のかかわりの理解】は、子どもの成長発達や健康問題に影響を及ぼす要因を理解するための、重要な学習内容であると考えられる。育成期看護学概論の目的に、子どもと子どもを取り巻く社会の関係の理解を加え、意図的に教育していきたいと考える。

次に、フィールド観察のみでは、学生が観察内容を抽象化することは難しいので、今後もフィールド観察後にグループディスカッションを続けると共に、本研究の成果を提示するなど、観察内容の概念化を促す授業方法の検討や工夫をしたいと考える。

さらに、フィールド観察と学外演習は同じ第1 Semesterであるので、学習成果を統合させ、健康の連続性や看護の役割の学習を促進させようと考えている。

VI. まとめ

入学初期に実施するフィールド観察により、【子どもの理解】として《子どもからののはたらきかけ》《子どものもののとらえ方》《発達している子ども》、【親子の理解】として《親子関係》《親のかかわり》、【子どもと周囲のかかわりの理解】として《きょうだいのかかわり》《子ども同士のかかわり》《社会のかかわり》について、学習できることが明らかになった。

育成期看護学概論Bの補強点は、フィールド観察の学習成果を授業で活用すること、観察内容を概念化するための教育方法を検討すること、学外演習の学習成果と統合させること等であると考えられた。

謝辞

本研究の趣旨を理解し、貴重な資料を提供してくれた学生にお礼を申し上げます。また、本学の教育活動に快くご協力くださいました子どもと家族の皆様に感謝いたします。

引用文献

- 1) 長谷川桂子, 石井康子, 出井美智子: 子どもの理解を深めることをめざしたフィールド観察の効果, 岐阜県立看護大学紀要, 1(1); 80-86, 2001.
- 2) 草野美根子, 寺田敦子, 今福ひとみ, 他: 小児看護実習における看護学生の子どもに対するイメージの変容—病棟実習と保育園実習の因子分析的検討—, 第28回日本看護学会集録・看護教育; 143-145, 1997.
- 3) 草野美根子, 寺田敦子, 今福ひとみ, 他: 子どものイメージに関する研究(第2報)—小児看護実習前後の比較—, 日本看護研究学会雑誌, 21(3); 356, 1998.
- 4) 山中久美子, 吉川彰二, 永島すみ: 本学学生の子どもへの関心と子どもの理解の変化, 大阪府立看護大学紀要, 9(1); 15-23, 2003.
- 5) 西田志穂, 込山洋美, 江本リナ, 他: 実習の実際, Quality Nursing, 8(11); 69-77, 2002.
- 6) 奈良間美保: 系統看護学講座専門22 小児看護学1, 第10版; 4-8, 2003.
- 7) 中林雅子, 平井るり, 安田恵美子, 他: 実習準備としての演習モデル, Quality Nursing, 8(9); 71-77, 2002.

(受稿日 平成17年3月17日)